

方明改交本	伊藤貴磨訳
卻說美猴王榮歸故里自剿了混世魔王奪了一口大刀逐日操演武藝教小猴削竹為標削木為刀治旗幡打哨子一進一退安營下寨玩耍多時忽然靜坐處想道	さて孫悟空は、故里に歸り、混世魔王を退治し、一振の大刀を得て、毎日のやうに武藝を練り、小猿どもには、竹や木を削つて、槍や刀を造らせ、旗指物まで造つて、呼笛を吹いて、進め！止れ！の調練に日を送つておりましたが、ある時突然、靜かに坐して考へながら言ひました。
我等在此恐作耍成真或驚動人王或有禽王獸王說我們操兵造反興師來相殺汝等都是竹竿木刀如何對敵需得鋒利劍戟方可如今奈何	「われわれはこゝで、こんな戰の眞似事をしてゐるが、もしも人間の王様や、禽獸の王達が、軍勢を催して攻めて來たら、お前らの竹竿や木刀では、到底敵ひこはあるまい。これはどうしても、鋭利な武器を得なければならないと思ふが、どうぢや。」
眾猴聞說個個驚恐道大王所見甚長只是無處可取	猿どもはかう聞かされて、みなみないぶかりました。「大王様の御意見もつともには存じますが、それらを得る場所がございません。」
正說間轉上四個老猴兩個是赤尻馬猴兩個是通背猿猴走在面前道大王若要治鋒利器械甚是容易	するとこの時、四匹の老猿がまるび出し、御前にかしこまつて言ひました。「大王様、もしも鋭利な武器が必要でございましたら、いと易いことでございます。」
悟空道怎見容易	「何故容易であるか。」
四猴道我們這山向東去有二百里水面那廂有傲來國界那國界中有一王位滿城中軍民無數必有金銀銅鐵等匠作大王若去那裡或買或造些兵器教演我等守護山場誠所謂保泰長久的機會	「この花果山の東方、二百里(支那里)の海の彼方に、傲來國といふのがございます。そこには一つの王城がございまして、軍兵も數多みますことなれば、必ずいろいろな鍛冶匠もございませう。大王様がそこへおいでになり、いるだけの兵器を、或ひは買ふなり、或ひは造らせるなり遊ばされ、われわれを調練して、この山城の守護にあたらせ給へば、これぞ誠に安泰長久の策ではございませんか。」
悟空聞說滿心歡喜道『汝等在此玩耍待我去來	悟空はこれを聞いて、大いに喜んで言ひました。「汝らはこゝで休んで待つてをれ、わしはこれから行って來るから。」
好猴王急縱筋斗雲霎時間過了二百里水面果然那廂有座城池六街三市萬戶千門來來往往人都在光天化日之下	悟空は急いで筋斗雲を起し、たちまちのうちに、二百里の海上を飛過ぎると、果してそこに一つの城市があり、城内は、千門萬戶、街路は四通八達して、往來の人々も賑々しく、いかにも平和なさままでありました。
悟空心中想道這裡定有現成的兵器待我去買他幾件還不如使個神通覓他幾件倒好	悟空は心中に想ふやう、「こゝにはきつと、出來上つた澤山の兵器があつて、幾らでも買へるだらうが、むしろ神通力を用ひて、手に入れるにしくはない。」
他就撚起訣來念動咒語向巽地上吸一口氣唬的吹將去便是一陣風飛沙走石	と、早くも祕法を修し、咒文を念じて、巽(東南)のかたに向つて、十分に息を吸ひ、ふうっと吹くと、忽ち一陣の風吹き起り、砂を飛ばし石を降らせました。
風起處驚散了那傲來國君王三街六市都慌得關門閉戶無人敢走	狂風の荒れる處、傲來國の君王を始め、八百八町の家々は、慌てゝ戸を閉し、たちまち往來は無人の街と化しました。
悟空才按下雲頭徑闖入朝門裡直尋到兵器館武庫中打開門扇看時那裡面無數器械刀槍劍戟斧鉞毛鎌鞭鈹撻簡弓弩叉矛件件俱備一見甚喜道我一人能拿幾何還使個分身法搬將去罷	悟空は靜かに雲間より下り、城の表門より押入つて、直ちに兵器庫に行き、門扉を開いてはいつてみると、なかには無數の兵器— 刀、槍、劍、矛から、斧、鉞、弓、弩の類まで備つてゐたので、大いに喜んで言ひました。「おれ一人では幾らも運べるものでない。やはり分身の法を以て搬んでやらう。」
好猴王即拔一把毫毛人口嚼爛噴將出去念動咒語叫聲『變』變作千百	そこで悟空は、一把の毛を抜き、口でかみ碎いて噴き出すや、咒文を唱へて、「變れ！」と叫べば、それが數百の小猿となり、我が

<p>個小猴都亂搬亂搶有力的拿五七件力小的拿三四件盡數搬個罄淨徑踏雲頭弄個攝法喚轉狂風帶領小猴俱回本處</p>	<p>ちにと奪ひ搬び、力の強い者は五六本、力の弱い者も三四個と擔ぎ、すつかり空にして、また雲を踏み、狂風を吹き募らせて、小猿諸共もとの棲家へと向ひました。</p>
<p>卻說那花果山大小猴兒正在那洞門外玩耍忽聽得風聲響處見半空中又又丫丫無邊無岸的猴精唬得都亂跑亂躲</p>	<p>さて花果山の大小の猿どもが、洞前で戯れてゐる時、急に風聲の響くを聞き、中空をみ上ぐれば、おびたゞしい猿の精が、もりもりと群がり、わあっと喊聲をあげて驅けて來るのをみました。</p>
<p>少時美猴王按落雲頭收了雲霧將身一抖收了毫毛將兵器都亂堆在山前叫道小的們都來領兵器</p>	<p>しばらくして、王様の悟空が雲間より下りて雲霧を收め、身をひと振りふつて毛を収めてしまふと、そこには兵器が山と積まれておりました。「家來ども、みんな來て武器を受取れ！」かう悟空が叫ぶので、</p>
<p>眾猴看時只見悟空獨立在平陽之地俱跑來叩頭問故</p>	<p>大勢の猿どもがはつと眼をみ張れば、悟空は既に眼の前の地上に立ってゐるので、みんな走りよつて頭をさげ、かしこまつて迎へました。</p>
<p>悟空將前使狂風搬兵器一應事說了一遍眾猴稱謝畢都去搶刀奪劍搥斧爭槍扯弓扳弩吟喝喝耍了一日</p>	<p>悟空はそこで、狂風を使つて武器を奪ひ、首尾よく運搬して來たことを、ひと通り話してきかせると、家來の猿どもは大いに驚き、悟空に御禮を言ひ終るや否や、われがちに、刀や劍を奪ひ、槍や斧を争ひ、弓や弩をいぢりまはしなどして、キャッキョと騒いで、その日一日を暮しました。</p>
<p>次日依舊排營悟空會聚群猴計有四萬七千餘口</p>	<p>次の日、以前のやうに隊列を組み、悟空が猿の全群を集めてみると、合計四萬七千餘匹に達しました。</p>
<p>早驚動滿山怪獸都是些狼蟲虎豹麋鹿獐 = 狐狸獾貉獅象狡狍猩猩熊鹿野豕山牛羚羊青兕狡兒神熬各樣妖王共有七十二洞都來參拜猴王為尊每年獻貢四時點卯也有隨班操備的也有隨節征糧的齊齊整整把一座花果山造得似鐵桶金城各路妖王又有進金鼓進彩旗進盔甲的紛紛攘攘日逐家習舞興師</p>	<p>それらが威武堂々演習を始めたので、滿山の怪獸共をおそれ伏せしめ、虎や、豹や、獅子や、象をはじめとして、ありとあらゆる獣どもや、いろいろの魔王にいたるまで、全山七十二洞の眷屬どもが、悉く集り來つて、猴王の悟空を拜し、貢物を奉つて家來にならんことを乞ひ、調練や演習に加はりましたので、毎日々々、花果山の天も地も崩るゝばかりの有様でした。</p>
<p>美猴王正喜間忽對眾說道汝等弓弩熟諳兵器精通奈我這口刀着實榔榔不遂我意奈何</p>	<p>かくて、悟空は得意の絶頂にありましたが、ある時急に、皆の者に言ひました。「お前達は、大よそ武器の扱方にも精通したやうであるが、おれのこの刀はお粗末で、おれにはどうも飽足りないが、どうしたものだらう。」</p>
<p>四老猴上前啟奏道大王乃是仙聖凡兵是不堪用但不知大王水裡可能去得</p>	<p>すると例の四匹の老猿が、進み出て申上げました。「大王様は、神仙でみらせられますから、世の常の兵器では用には立ちません。こゝに一案がございますが、大王様は、水の中へでもよくおいでになれますか。」</p>
<p>悟空道我自得道之後有七十二般變化之功筋斗雲有莫大的神通善能隱身遁身上天有路入地有門步日月無影入金石無礙水不能溺火不能焚哪些兒去不得</p>	<p>「わしは道を得て後、七十二般の變化の功を積み、隱身遁身の術はおろか、上は天に昇つて日月に歩すも障りなく、下は地に潜つて金石に入るも礙げない。ましてや水に入つて溺れず、火に入つて焚けざる位は、何でもないことだ。どうして行けない事があるものか。」</p>
<p>四猴道大王既有此神通我們這鐵板橋下水通東海龍宮大王若肯下去尋著老龍王問他要件甚麼兵器卻不趁心</p>	<p>「大王様がかゝる神通あらせらるゝからには、至つて易いことがございます。この鐵橋の下は、東海龍宮に通じておますから、いつそ大王様はそこへ參られ、龍王をお訪ねになつて、望まれるがまゝの武器を、お求めになつては如何でございます。」</p>

悟空聞言甚喜道等我去來	悟空は老猿の言葉を聞き、大いに喜んで叫びました。 「では、わしは行つて来るぞ！」
好猴王跳至橋頭使一個閉水法撚著訣撲地鑽入波中分開水路徑入東洋海底正行間忽見一個巡海的夜叉擋住問道那推水來的是何神聖說個明白好通報迎接	悟空は橋の上に立って、閉水の法を行ひ、祕法を唱へて、ざんぶとはかり海中に飛入り、水を分けて、東洋海の底へやって來ると、忽ちみまはりの巡海夜叉に逢ひました。
悟空道吾乃花果山天生聖人孫悟空是你老龍王的緊鄰為何不識	彼は悟空をとどめて言ひました。「水を分けておいでになつたのは、どなた様ですか。お名前を明し下さらば、御案内いたしませう。」
那夜叉聽說急轉水晶宮傳報道大王外面有個花果山天生聖人孫悟空口稱是大王緊鄰將到宮了	「それがしは、花果山の天生聖人孫悟空と申す者で、そちの主の龍王の近所の者であるが、そちにはわからぬか。」
東海龍王敖廣即忙起身與龍子龍孫蝦兵蟹將出宮迎道上仙請進請進	きくより夜叉は、急いで水晶宮に駆けつけて、報告して言ひました。「大王様、花果山の天生聖人孫悟空と申される方が、大王様の近所の者だといって、表に參られてをります。」
直至宮裡相見上坐獻茶畢問道上仙幾時得道授何仙術	東海龍王の敖廣は、早速數多の家來を引きつれ、恭しく出迎へて言ひました。 「よくこそ、おいで下されました。どうぞ、どうぞ。」
悟空道我自生身之後出家修行得一個無生無滅之體近因教演兒孫守護山洞奈何沒件兵器久聞賢鄰享樂瑤宮貝闕必有多餘神器特來告求一件	かうして宮中へ迎へて、茶を捧げなどし、龍王から問ひかけました。「上仙は、いつ道を得られ、如何なる仙術を心受けなされましたか。」
龍王見說不好推辭即著蹶都司取出一把大捍刀奉上悟空道老孫不會使刀乞另賜一件	悟空は答へて言ひました。「それがしは出生後、出家修業いたし、永世不滅の法を體得いたしました。この度兒孫らを教練して、山洞を守護いたさせようとはかりましたが、如何せん手頃の武器がありません。久しく聞く所によりますと、お隣さんの貴方は、立派な宮殿に住はれ、なだたる武器を數多く蓄へてみられるとのこと、本日は特に、ご無心に上つた次第です。」
龍王又著鮐大尉領鱧力士抬出一杆九股叉來悟空跳下來接在手中使了一路放下道輕輕又不趁手再乞另賜一件	龍王はかうきいて、いやとも言はれず、家來に命じて、一振の大刀を持出させました。悟空はこれを見て、言ひました。「それがしは、刀は使ひ馴れません。どうぞ別のものを。」
龍王笑道上仙你不曾看這叉有三千六百斤重哩	龍王は又、力士の家來に命じて、九股叉といふ得物を擔ぎ出させました。悟空はやにはに飛び下り、手にとって一振したまゝ、からりと投げ出して言ひました。「これは軽い！別の、手頃のものをどうぞ。」
悟空道不趁手不趁手	龍王は笑つて言ひました。「その九股叉は、三千六百斤ございますぞ！」
龍王心中恐懼又著鰻提督鯉總兵抬出畫捍方天戟那戟有七千二百斤重悟空見了跑近前接在手中丟幾個架子撒兩個解數插在中間道也還輕輕	「何のこれしきのものでは、不十分です。」
老龍王一發害怕道上仙我宮中只有這根戟重再沒甚麼兵器了	龍王は心中恐れをなしましたが、又家來に命じ、一個の方天戟(大戟。戟は槍に似て太く先に枝のあるもの)を擔ぎ出させました。その戟は實に七千二百斤の重さがあります。悟空はこれを見て進み寄り、手に取るや、家來どもを遠ざけ、びゆうびゆうと打振ること數度、はたと中に止めて言ひました。「まだ軽い！軽い！」
悟空笑道『古人云「愁海龍王沒寶哩」你再去尋尋看若有可意的一一奉價』龍王道『委的再無』	龍王は、いよいよおじけを振るつて、「わが宮中では、これが一番重い戟です。これ以上のものはございません。」と云つて
正說處後面閃過龍婆龍女道大王觀看此聖絕非小可我們這海藏中那一塊天河定底的神珍鐵這幾日霞光豔	困り果てゝ居るところを、丁度、龍王の奥方が、ふと後ろを通られ、心配して龍王にさやいて言はれました。「あの方を見ますのに、たゞの方とも思はれません。いつそ海藏にしまつてある、あの

豔瑞氣騰騰敢莫是該出現	鐵柱を差上げたら如何ですか。不思議なことに、二三日來あの鐵柱には、霞のやうな瑞氣かたゞよつてをりまする。」
龍王道那是大禹治水之時定江海淺深的一个定子是一塊神鐵能中何用	「何を申すか、あの鐵柱は、昔、夏の國の聖人大禹が、河水を治められた時に、江海の深淺をさぐられた神器で、武器などの用をなすものではない。」
龍婆道莫管他用不用且送與他憑他怎麼收造送出宮門便了	奥方はさらに言はれました。「役に立つ立たぬはさて置いて、あの方にお譲りになり、あとはおまかせになって、ともかく歸つていただければ、それでよろしいでは御座いませんか。」
老龍王依言盡向悟空說了悟空道拿出來我看	龍王はそこで、悟空に向つてこの事を説明すると、悟空は言ひました。「では取出してみせて戴きたい。」
龍王搖手道扛不動扛不動需上仙親去看看	龍王は手を振つて言ひました。「持上げられるやうな、しろものではないのです。上仙が御自身で行つて、ご覧になるより方法がありません。」
悟空道在何處你引我去	「どこにあるのですか、ご案内下さい。」
龍王果引導至海藏中間忽見金光萬道龍王指定道那放光的便是	龍王が悟空を案内して、海藏の中にはいますと、果して金光燦然として、眼もくらむばかりです。龍王は指して言ひました。「あの光を放つてゐるのが、さうです。」
悟空撩衣上前摸了一把乃是一根鐵柱子約有門來粗二丈有餘長他盡力兩手擱過道忒粗忒長些再短細些方可用	悟空は袖をまくし上げ、進み寄つて、ひと撫でしてみると、それは一本の鐵の柱で、太さも太し、長さも二丈餘りもありました。彼は兩手で力一ぱい打敲いて、言ひました。「少し太いし、ちよつと長すぎるね。もう少し短くて細いと、丁度いゝんだがなあ。」
說畢那寶貝就短了幾尺細了一圈悟空又顛一顛道『再細些更好』那寶貝真個又細了幾分	かう言ひ終ると同時に、その寶柱は、見る見る何尺か短くなり、又幾圍りか細くなりました。悟空は又繰返して、「もうちよつと細くなれば、さらに結構だがなあ。」と言ふと、寶柱はまたまた幾分細くなりました。
悟空十分歡喜拿出海藏看時原來兩頭是兩個金箍中間乃一段烏鐵緊挨箍有鑄成的一行字喚做如意金箍棒重一萬三千五百斤	悟空は大いに喜んで、それを海藏から引出して、よくよく見ると、全體は黒々とした鐵で出來てゐ、兩端には金の箍がはめてあり、箍に近く、「如意金箍棒重さ一萬三千五百斤」と鑄附けてありました。
心中暗喜道想必這寶貝如人意	悟空はこの寶ものは、きつと人の意のまにまにに、伸び縮みするものに違ひないと想ひ、心中ほくほくと喜びました。
一邊走一邊心思口念手顛着道再短細些更妙拿出外面只有二丈長短碗口粗細你看他弄神通弄開解數打轉水晶宮裡唬得老龍王膽戰心驚小龍王魂飛魄散龜鱉電髦皆縮頸魚蝦鼈蟹盡藏頭	
悟空將寶貝執在手中坐在水品宮殿上對龍王笑道多謝賢鄰厚意	悟空は寶ものを手にして、水晶宮の殿上にどつかと坐り、龍王に對して笑つて話しかけました。「御厚意は十分感謝いたします。」
龍王道不敢不敢	「どういたしまして。」
悟空道這塊鐵雖然好用還有一說	「この鐵棒は素晴らしいものですが、もう一言申したい事があります。」
龍王道「上仙還有甚說	「この上未だおつしやり度いこととは。」
悟空道當時若無此鐵倒也罷了如今手中既拿著它身上更無衣服相趁奈何你這裡若有披掛索性送我一件一總奉謝	「この鐵棒がなかった時は、これ迄通りですみましたが今こんな立派な武器が手に入ったからは、それ相當の衣類も欲しくなります。もし禮裝の類でも御座らば、一件賜はりたいものでござる。」
龍王道這個卻是沒有	「そんな物は生憎ございません。」

悟空道一客不犯二主若沒有我也定不出此門	悟空は <b>押強く</b> 言ひました。「ことわざに『一客二主を犯さず。』(獨力にて全部調達せられたしの意。)といふことがあります。もし無いとあれば、それがしは此の場を動きませんぞ！」
龍王道煩上仙再轉一海或者有之	「貴殿が他の海へでも行って、 <b>お捜しになれば</b> 、あるひは有るかもしれません。」
悟空又道走三家不如坐一家千萬告求一件	「『三家に走るは、一家に坐するに如かず。』(三軒走廻るより、一軒に坐込んである方がよいの意。)と申しますぞ。どうあつても <b>貴殿に</b> 賜はり度いもので御座る。」
龍王道委的沒有如有即當奉承	「御所望の品はござりません。あれば早速にも差上げますが。」
悟空道真個沒有就和你試試此鐵	「さあ、まだ無いなどゝ申して、この鐵棒を喰ひ度いか！」
龍王慌了道上仙切莫動手切莫動手待我看舍弟處可有當送一副	悟空は怒り出しかう叫ぶと、龍王は慌てゝ言ひました。「まあまあ、お静まり下さい。舍弟の所に言つてやつて、もしあれば、差し上げませう。」
悟空道令弟何在	「令弟はいつこにをられるか。」
龍王道舍弟乃南海龍王敖欽北海龍王敖順西海龍王敖閏便是	「舍弟は、南海の龍王敖欽と、北海の龍王敖順と、西海の龍王敖閏との三人です。」
悟空道我老孫不去不去俗語謂三不敵見二只望你隨高就低地送一副便了	「この我輩は、斷じて参りませんぞ！ 諺に、あやふやな三つより、確かな二つ—と申しますからな。何卒貴殿から、 <b>申し付けて</b> 戴きたいもので御座る。」
老龍道不須上仙去我這裡有一面鐵鼓一口金鐘凡有緊急事播得鼓響撞得鐘鳴舍弟們就頃刻而至	「上仙はおいでになる必要はありません。こゝに一つの鐵鼓と、金鐘とがありますが、火急の場合は、鼓を打ちたゞき、鐘を撞きならしますと、舍弟らは、即刻馳せつけて参りますから。」
悟空道既如此快些去播鼓撞鐘	「しからば、早速、太鼓や鐘を打鳴らして戴きたい。」
真個那髦將便去撞鐘 <b>鼙師即來</b> 播鼓少時鐘鼓響處果然驚動那三海龍王須臾來到一齊在外面會着	そこで、海の眷屬どもをやり、鐘を撞き、鼓を打鳴らさせました。暫らくして、その響が遠くへ達しますと、果して三海の龍王達は、すはとばかりに立ち上り、一齊に殺到して来て、 <b>宮殿の外</b> に相會しました。
敖欽道大哥有甚緊事播鼓撞鐘	<b>二番目の弟の敖欽</b> が言ひました。「兄さん、鐘など鳴らして、どんな大事が出来たんですか。」
老龍道賢弟不好說有一個花果山甚麼天生聖人早間來認我做鄰居後要求一件兵器獻鋼又嫌小奉畫戟嫌輕將一塊天河定底神珍鐵自己拿出手丟了些解數如今坐在宮中又要索 <b>甚麼</b> 披掛我處無有故響鐘鳴鼓請賢弟來你們可有甚麼披掛送他一副打發出門去罷了	龍王は説明して言ひました。「弟よ！ 困ったことが出来たわい！ 今朝、花果山の天生聖人なにがしと言ふ者が参って、鄰人のよしみだといつて、一個の武器を求めたので、九股叉をあたへると、小さ過ぎるといふし、方天戟を與へると、輕過ぎるなどゝ申すのぢや。とうとう、 <b>あの</b> 大禹の寶柱を、自分で引きずり出し、今なほ宮中で頑張つて、またまた衣類までもよこせとたつて申すが、わしの處にはそんな物はないので、鐘を鳴らして、お前達を呼んだのぢや。お前達に <b>相當の品</b> が何かあれば、一揃與へて、歸してしまつたらどうだらう。」
敖欽聞言大怒道我兄弟們點起兵拿他不是	敖欽はかう聞くと、大いに怒つて言ひました。「 <b>何を無禮な</b> ！ 我々が兵を起して、引つ捕へてしまつたらどうです。」
老龍道莫說拿莫說拿那塊鐵挽著些兒就死磕著些兒就亡挨挨兒皮破擦擦兒筋傷	龍王は <b>押しとぶめて</b> 、「先づ、先づ、起兵は待て！ あの寶柱をぶんぶん振廻されては、徒に死人、怪我人の山をきづくばかりぢや。」
西海龍王敖閏說二哥不可 <b>與他</b> 動手且只湊副披掛與他打發他出了門啟表奏上天天自誅他	そこで一番末の敖閏が、言葉をさしはさみました。「二番目の兄さんのやうに、兵を動かすのはよくありません。 <b>一旦</b> 、衣裳や冠り物などを與へて置いて、彼を門の外に閉め出してしまつてから、書を以て天帝に上奏して、天誅を下していただだけは如何です。」
北海龍王敖順道說的是我這裡有一	北海龍王の敖順も言ひました。「それはよい考へです。わたくしは

雙藕絲步雲履哩	こゝに、一雙の藕絲步雲履(藕の糸で編んだ、仙人の履)を持ってゐます。」
西海龍王敖閏道我帶了一副鎖子黃金甲	すると、西海龍王も、「わたくしも、一つの鎖子黃金甲(鎖あみの金のよろひ)を持ってゐます。」と言ひ、
南海龍王敖欽道『我有一頂鳳翅紫金冠哩』	遂に氣の荒い南海龍王も、「それがしも、一個の鳳翅紫金冠(鳳の翅をかざつた赤銅の冠)を所持いたしてをる。」と皆々言へば、
老龍大喜引入水晶宮相見了以此奉上	兄の龍王は大いに喜んで、水晶宮に入って、三人を悟空に引合はせ、それぞれの寶物を、差し出しました。
悟空將金冠金甲雲履都穿戴停當使動如意棒一路打出去對眾龍道『聒噪聒噪』	そこで悟空は、金冠、金甲、雲履を、それぞれ身に着け、如意金箍棒を打振つて、悠々と立ち去るにつき、又更めて龍王達に言ひました。「どうもとんだ大騒ぎをさせて、相すまなんだなう！」
四海龍王甚是不平一邊商議進表上奏不題	四海龍王は、腹の虫のをさまりようもなく、たゞちに相談して、天帝に上奏することにしました。
你看這猴王分開水道徑回鐵板橋頭躡將上去只見四個老猴領著眾猴都在橋邊等候忽然見悟空跳出波外身上更無一點水濕金燦燦的走上橋來唬得眾猴一齊跪下道大王好華彩好華彩	さて悟空は、また開氷の法を行ひ、花果山目指して引上げて來ると、四匹の老猿は、あまたの猿をひきゐて、橋のほとりまで出迎へてゐましたが、悟空が波間から跳り上つた所を見れば、少しの濕り氣もなく、その上、金色燦然たる裝束を着けてゐたので、一同一齊にひざまづき、「大王様の、ご立派なこと！」と、口々に褒め上げました。
悟空滿面春風高登寶座將鐵棒豎在當中	悟空は得意滿面、王座に登り、眞中にどしんと如意棒を突き立てました。
那些猴不知好歹都來拿那寶貝卻便似蜻蜓撼鐵樹分毫也不能禁動	家來の猿どもは、集り來つて、觸つて見るやら、動かして見るやらしましたが、まるで蜻蛉が鐵の樹をゆるがさうとするやうに、少しも動かすことが出来ません。
一個個咬指伸舌道爺爺呀這般重虧你怎的拿來哩	皆々舌をまいて言ひました。「大王様！こんな重い物を、どうして持つて來られたのですか。」
悟空近前舒開手一把搗起對眾笑道物各有主這寶貝鎮于海藏中也不知幾千百年可的今歲放光龍王只認作是塊黑鐵又喚作天河鎮底神珍那厮們都扛抬不動請我親自去拿那時此寶有二丈多長門來粗細被我搗它一把意思嫌大它就小了許多再教小些它又小了許多再教小些它又小了許多急對天光看處上有一行字乃「如意金箍棒一萬三千五百斤」你都站開等我再叫它變一變	悟空はそばにより、鐵棒を打敲きながら、笑つて言ひました。「この寶物は、元來海藏の中にあつたものだが、幾千年たつたか知れないものだ。この物は黑鐵で出來てゐるが、不思議なことに、今年初めて光を放し出したさうだ。龍王達も動かすことが出来ないの、わし自身持つて行つてくれと申した程のものぢや。」悟空はそれから、その鐵棒が、意のままに伸び縮みすることを説明し、
看他將那寶貝顛在手中叫小小小即時就小做一個繡花針兒相似可以擔在耳朵裡面藏下眾猴駭然叫道『大王還拿出來耍耍』猴王真個去耳朵裡拿出托放掌上叫大大大即又大做門來粗細二丈長短	「小さくなれ！小さくなれ！」あるひは、「大きくなれ！大きくなれ！」などと叫んで、伸び縮みさせ、大勢の猿どもに見物させて、打ち興じてゐました。
他弄到歡喜處跳上橋走出洞外將寶貝托在手中使一個神通把腰一躬叫聲長他就長得高萬丈頭如泰山腰如峻嶺眼如閃電口似血盆牙如劍戟	
手中那棒上抵天下抵地把些虎豹狼	すると忽ち、悟空がかゝる寶物の武器を、龍王から奪つて來たこと

<p>蟲滿山群怪七十二洞妖王都唬得磕頭禮拜戰兢兢魄散魂飛</p>	<p>が、全山七十二洞の魔王や怪獣どもにも知れ渡り、彼等はいよいよ悟空の武威に恐れ、<b>ぞろぞろと連れ立って、お喜びを申し上げに参上</b>しました。</p>
<p>霎時收了法像將寶貝還變作個繡花針兒藏在耳內復歸洞府慌得那各洞妖王都來參賀</p>	<p>悟空は、金箍棒を、刺繡針程の小さにし、耳のなかに収めて、洞内で七十二洞の主達から、拜賀の禮を受けることになりました。</p>
<p>此時遂大開旗鼓振銅鑼廣設珍饈百味滿斟椰液萄漿與眾飲宴多時卻又依前教演</p>	<p>この日、洞内に大裝飾をほどこし、銅鑼を鳴らし、大卓に百味百珍をならべ、あらゆる果酒果汁を添へ、大宴會を始めました。<b>宴終れば</b>、また例によつて教練を行ひ、<b>大いに花果山の武威を發揚</b>しました。</p>
<p>猴王將那四個老猴封為健將將兩個赤尻馬猴喚作馬流二元帥兩個通背猿猴喚作崩芭二將軍將那安營下寨賞罰諸事都付與四健將維持他放下心日逐騰雲駕霧遨遊四海行樂千山施武藝遍訪英豪弄神通廣交賢友</p>	<p><b>その後</b>悟空は、四匹の老猿を、或ひは元帥とし、或ひは將軍として重く用ひ、守備、教練、賞罰のことなどを司らせ、<b>後顧の憂ひ</b>をなくすると、自分は毎日、雲に騰り、霧に駕して、四海に遊行し、千山に行樂して、武藝を練り、廣く英雄豪傑を訪ねて、交友することをことゝしました。</p>
<p>此時又會了個七弟兄乃牛魔王蛟魔王鵬魔王獅駝王獼猴王獨犍王連自家美猴王七個日逐講文論武走器傳觴弦歌吹舞朝去暮回無般兒不樂把那萬里之遙只當庭闈之路</p>	<p>その當時、たちまち七人の兄弟分が出来ました。それは、牛魔王と、蛟魔王と、鵬魔王と、獅駝王と、獼猴王と、獨犍王(以上おのおの獸の精の化けた魔もの)と—美猴王たる孫悟空とを加へての七人でありました。</p>
<p>卻說那個高天上聖大慈仁者玉皇大帝一日駕坐金闕雲宮靈霄寶殿聚集文武仙卿早朝之際忽有邱弘濟真人啟奏道萬歲通明殿外有東海龍王敖廣進表聽天尊宣</p>	<p>話かはつて、天上界の玉皇大帝が、ある日、金闕雲宮(玉帝の御宮)の靈霄寶殿(玉帝の政務をとられる所)に出御しまして、文武の仙官を御聚めになつた時、<b>早速</b>邱弘濟真人が、上奏しました。「陛下、通明殿(天宮の前殿の名)外に、東海龍王敖廣なる者が、上表を奉つて、陛下の御宣下を乞ひ奉つて居ります。」</p>
<p>詔玉皇傳旨著宣來敖廣宣至靈霄殿下禮拜畢旁有引奏仙童接上表文玉皇從頭看過乃是表奏猴王強索兵器披掛之事</p>	<p>玉帝は旨を傳へて召されますと 敖廣は靈霄殿下にお目通りして、拜謁を行ひ、傍の仙童に托して、上表文を奉りました。玉帝が御覽になると、それは即ち、<b>花果山の</b>猴の王が、兵器装束を強奪した件でありました。</p>
<p>玉帝覽畢傳旨着龍神回海朕即遣將擒拿老龍王頓首謝去</p>	<p>玉帝は覽終られると、「龍神は海に歸り、朕が直ちに將を遣して、彼を捕ふるを待て。」と宣下ありましたので、龍王は頓首再拜して退出致しました。</p>
<p>大天尊宣眾文武仙卿問曰這妖猴是幾時產育何代出身卻就這般有道</p>	<p>そこで玉帝は、もろもろの文武の仙官に宣まふやう、「この妖猴は、いつの世に生れ、何代を経て、かゝる神通を得たものであるか。」</p>
<p>一言未已班中閃出千里眼順風耳道這猴乃三百年前天產石猴當時不以為然不知這幾年在何方修煉成仙</p>	<p>御言葉の終らないうちに、列座にあつた、千里眼(遠目のきく役人)と順風耳(遠耳のきく役人)との二官が、申しました。「この猴は三百年前、天地の精氣を受けて、生れ出でましたる石猴でございますが、この數年來は、何處にて仙道を修練いたしましたるや、相わかりかねます。」</p>
<p>玉帝道那路神將下界收服</p>	<p>玉帝は續いて仰せられました。「いづれの神將を下して、調伏したものであらうか。」</p>
<p>言未已班中閃出太白長庚星俯伏啟奏道臣啟陛下可念生化之慈恩降一道招安聖旨把他宣來上界授他一個大小官職與他籍名在籙拘束此間若受天命再後升賞若違天命就此擒拿</p>	<p>とすぐさま、列座の中から、太白金星がかしこまつて、奏上いたしました。「臣が考へますに、こは、陛下が慈恩を垂れ給ひ、一たび聖旨を下して宣撫せられ、天界に招き上させ、官職を受け、一旦天上に止め置かれました方がよろしいかと存じます。かくて、勅命に従へば、位を陞し、もし勅命に違へば、こゝにはじめて成敗遊</p>

	ばされては、如何のものかと存じ上げます。」
玉帝聞言甚喜道依卿所奏即著文曲星官修詔著太白金星招安	玉帝はこの言を聞かれ、甚だ喜ばしきうに、「卿の申すところによるであらう。」と言はれ、早速太白金星に詔書を下され、悟空を召されることになりました。
金星領了旨出南天門外按下祥雲直至花果山水簾洞對眾小猴道我乃天差天使有聖旨在此請你大王上界快報知	金星は旨をかしこみ、南天門から出で、祥雲にのつて、直ちに花果山水簾洞に至り、小猿どもに言ひました。「我は天界よりの御使である。汝等の大王を天界に召すために、聖旨を奉じて來つた者であるから、早々に申しきけよ！」
洞外小猴一層層至洞天深處道大王外面有一老人背著一角文書言是上天差來的天使有聖旨請你也	洞外にあった小猿どもはひとかたまりになつて、洞奥にかけこんで報らせました。「大王様、門外に一人の老人が、天上からの使だと言つて、參つてをります。何でも大王様を、天上界へお迎へするんだとか言つてをります。」
美猴王聽得大喜道我這兩日正思量要上天走走卻就有天使來請叫快請進來	悟空はこれを聞くと、大いに喜んで、「おれはこの二三日、天上界へ昇つて見ようと思つてゐたところだつたが、天からお召しが來たとは、丁度よかつたわい。」と言ひ、「早くお通し申せ！」と叫びました。
猴王急整衣冠門外迎接金星徑入當中面南立定道我是西方太白金星奉玉帝招安聖旨下界請你上天拜受仙籙	悟空が衣冠を正して、門外まで迎へに出ると、金星は直ちに奥に通つて、南面しておごそかに申しました。「我は即ち、西方の太白金星にして、この度聖旨を奉じ、汝を天上に召して、仙官を授けるために參つたものである。」
悟空笑道多感老星降臨	悟空はにこにこして言ひました。「老星の御降臨を感謝いたします。」
教小的們安排筵宴款待金星道聖旨在身不敢久留	そして家來どもに、宴席を用意させて、款待しようとするすと、金星は固くことわつて言ひました。「聖旨を奉じて參つた身で、久しく留つてゐることはなりません。」
悟空道承光顧空退空退即喚四健將分付謹慎教演兒孫待我上天去看看路卻好帶你們上去同居住	「それはまことに、残念！残念！」かう悟空は叫んで、四匹の老猿を呼び、「あとを確かと頼んだぞ！わしは一足先きに天上へ行くが、都合によりお前達をもあとより迎へて、一しよに住めるやうになるかも知れない。」かう言ひすて
四健將領諾這猴王與金星縱起雲頭升在空霄之上	悟空は、金星とともに雲を起し、天上界にと昇つて行きました。